

# わが国近世までの牛馬飼養の歴史 上

岩 元 明 久

## 目 次

1. はじめに
2. 海上の道
3. 縄文人と弥生人
4. 古代までの日本社会の農業および畜産
5. おわりに

## 1. はじめに

本稿の目的は、環境問題や飼料の海外依存、さらには代替肉のクローズアップなど、大きな転換点を迎えているように感じられるわが国畜産を前にして、同業にチャレンジしていくことの意義について、わが国の畜産業の歴史をたどることにより、考察を深めることである。

ところで、わが国は、明治時代になるまで食肉を目的とした家畜の飼養の習慣はなかったと言われているが、歴史をたどるにあたっては、その実態と理由を明らかにしていくことが課題となる。畜産業が農業の一部として行われてきたことは、『農業研究』第34号（2021）において考察したが、農業そのものの考察が不十分であった。これからは、農業の歴史を同時にたどりつつ、畜産について、考察を深めることとしたい。

## 2. 海上の道

『農業研究』第34号(2021)において、古代日本には食肉風習を伴う北方的食生活と植物性食物中心の風習を持つ南方の食生活のせめぎ合いがあったという加茂の説を紹介した。そして、北方的食生活が渡来民によってもたらされる以前に、南方の食生活は主として東南アジアから移入され、弥生式文化の基礎になっていたとしていることを述べた。

南方からということになると、農学を学んできた者としては、柳田國男の『海上の道』が自然と連想される。ちくま文庫『柳田國男全集 I』の最初の収録作品は、『海上の道』である。福田アジオの解説によると、『海上の道』は柳田が死去する前年の1961年7月に刊行されていて、収録された各論文はすべて戦後のもので1つを除いて1950年から55年の間に集中的に発表されたものであることに特徴があるという。<sup>1)</sup>

この時代は、皇国史観のもと敗戦へ突き進んだ太平洋戦争後の談論風発の時代であったと考えられるが、この点については後でまた触れることとしたい。日本国あるいは日本人というものをもう一度考え見直そうという機運が国全体で高まっていた。

『海上の道』のまえがきの冒頭は、「私は三十年ほど前に、日本人はいかにして渡って来たかという題目について所感を発表したことがあるが、それからこの方、船と航海の問題が常に念頭から離れなかった。」<sup>2)</sup>からはじまる。同時に表紙裏には、「日本近海の海流図 海上保安庁水路部提供」という現在の朝鮮半島を含む本州以南、台湾から八重山列島にかけての地図を掲載している。

例えば、網野善彦著『日本社会の歴史(上)』によれば、約200万年前、アジア大陸の東端は、巨大な内陸湖を抱くサハリン・北海道・本州弧が陸橋をなし、北に千島弧、南に琉球弧がやはり短い陸橋をなして大陸との間に大きな湖を抱いていた。地球上の気候は、周期的に寒冷期と温暖期を繰り返し、約30万年前には千島弧と琉球弧は列島になり、約1万8千～1万7千年前の第4氷期後半頃まで、サハリン・北海道・本州弧はときどき海進によって途切れることもあったが内陸湖を抱き続けた。この陸橋には、大陸の南方と北方からさまざまな

動物が移動し、生活してきた。このような動物群とともに、約 50 万年前には人類が移住していたことが遺物によって推定される。そして、ほぼ 4 万年から 3 万年前には、後期旧石器を使う人類が、この陸橋の全域に広く生活するようになっていた。ところが、寒冷期を超え約 1 万 8 千～1 万 7 千年前に、温暖化に伴う海進がはじまり、いくつかの大きな島になっていき、1 万 2 千年前には日本列島がほぼ現状に近い姿をあらわしだしたという。<sup>3)</sup>

柳田の関心は、日本人が「いかにして渡って来たか」だが、その視野はさかのぼってもせいぜい 1 万 2 千年前までであり、関心のあり方が「いかにして渡って来たか」であり、すでに日本列島には人類が生活していた事実には関心が向いていないことを確認しておきたい。その上で、『海上の道』の主要テーマは、冒頭に収録されている、昭和 27 年に発表された同名の論文にほぼ集約されていると思われるので、以下本論の関心に即しつつ要約してみたい。

久しい間気がつかず、解答も得られていない問題の中でも四面海で囲まれた島国の海上生活に対する無知は異常であると、柳田は書きはじめる。そして、海上から海岸に向かってまともに吹いて来るアイノカゼに言及する。もう 25 年ほど前のことになるが、富山県に住んだ時期がある。富山では、越中国司だった大伴家持とともにアイノカゼは人口に膾炙する。北陸新幹線が金沢まで延伸し、同時に北陸本線は西から金沢までとなり、富山、金沢間は「あいの風とやま鉄道」となって、ローカル線化した。県外者は「愛の風」と思うだろうが、実は違う。アイノカゼは「数々の渡海の船を安らかに港入りさせ、またはくさぐさの珍らかなる物を、渚に向かって吹き寄せる風のことであった。」<sup>4)</sup>

柳田は、明治 30 年の夏、渥美半島の伊良湖岬に滞在し、風の強かった翌朝に椰子の実の流れよっているのを目撃する。帰京して島崎藤村にその話をしたところから、「椰子の実」の歌が生まれた。「もちろん私は椰子の実の漂着地の一つをもって、原始日本人の上陸点と見ようとするのではない。しかし少なくとも日本の海岸線の数千里の延長の中で、特に殊邦の物の流れ寄りやすい区域に限られ、従って久しく世に知られずに過ぎたという点は参考にな」るだろうと続ける。<sup>5)</sup> 最初は漂着した島々に、なぜ日本人は危険を犯してまで辛苦して家族朋友を誘ってまでまた渡ってくるようになったのか、それは宝貝の魅力のためであった。秦の始皇の世に銅貨を鑄るようになるまでは、中国の至宝は

宝貝であり、なかでも子安貝の産地は限られており、極東では宮古島を中心とした珊瑚礁上よりほかにはなかった。中国で宝貝の重視願望がほぼ頂点に達せんとした約2千年前がちょうど極東列島のいずれかの一つに始祖日本人の小さな群が足を印した頃らしい。

そこから、話は稲作の問題に転ずる。「ちょうど縄文期と弥生式期の境目の頃に、この国へは種籾が入って来て、それから今のような米作国に、おいおいと進展したということらしいが、それがまず自分には承服しがたい。あらゆる穀作にも通じて言えることだが、稲にはことに年久しい観察に養われた、口伝とも加減とも名づくべき技芸が備わっていた。(中略)すなわち最初から、少なくともある程度の技術とともに、あるいはそれ以外に米というものの重要性の認識とともに、自ら種実を携えて、渡って来たのが日本人であったと、考えずにはおられぬ理由である。」「注意せずにはいられない一つの特徴は、右に申すごとく特別にこれを重視し、あらゆる民間の信仰行事から、歳時暦法の末に至るまで、もっぱら稲の栽培収穫を目標として行われて来たことであった。米の信仰的用途ともいふべきものが、(中略)四隣の幾つかの稲作国と共通のものが、指示し得られるようになって来たのである。昨年創始せられた新嘗研究会の成績が切に期待せられる」と述べている。<sup>6)</sup> 宝貝の需要が下火になると、「次々と水豊かに草木の濃く繁った、地形の雄大なる陸地に、将来の足掛りを、求めようとしであろう」<sup>7)</sup>と結んでいる。

皇国史観のくびきから解放された状況下、日本中を熱狂に巻き込んだのは静岡県登呂遺跡の発掘だった。1947年には遺跡調査会が発足し、考古学・古代史・建築史・植物学・地質学・農業史学の面々が発掘に加わった。登呂遺跡の発掘や1946年の岩宿における旧石器発見で、空前の考古学ブームが到来したが、人々の関心が向かったのは縄文ではなく弥生だった。「登呂をめぐる熱狂は、何よりそれが日本敗戦まで皇国史観に覆われていた日本の古代史を明らかにする鍵と考えられたこと、そして水田稲作＝「日本文化」の起源の探究ととらえられたことによる。そのためには、農耕以前、あるいは天皇制とは関係をもたない大湯環状列石のような縄文遺跡ではダメだったのである。」「登呂遺跡は、戦後の「水田中心史観」に立つ研究の出発点となったのである。」<sup>8)</sup> 坂野徹によれば、1951年に柳田らによって結成され三笠宮が主宰した「にいなめ研究

会」は、象徴天皇と平和日本が強力に打ち出された当時の思潮の一角を占めていたのである。

『海上の道』に収録された論文は、以下「海神宮考」「みろくの船」「根の国の話」「鼠の浄土」などと続く。そのテーマは、〈ニルヤと根の国〉、つまり、日本人のルーツをめぐってであり、稲穂等の伝来についての断片的なフォークロアの紹介である。柳田らにとっては、稲は単なる一農作物ではなく、稲作文化複合とでもいうべき一つの文化の象徴であった。それは柳田らにとっては、日本文化と置き換え可能なものであり、同時に渡来したものであった。確かに、植物の馴化、栽培作物化は一個人の単なる思いつきや偶然で到底なされるものではない。農作物の栽培は、agriculture と言われるように文化そのものである。それは「渡来した」と考えるのが無難なわけであるが、どのように渡来したのか、つまり、いつ、どこから、どのように（侵略によるのか、順次のほぼ平和的な混住によるのか）などなどによって、その伝播の意味は百八十度異なることになるだろう。太平洋戦争直後の戦後民主主義の時代に、平和的な稲作の〈弥生文化〉を発掘することには科学を超えた象徴的な意味があったようである。

そのような背景があって刊行された『海上の道』の中で、それでは畜産はどのように取り扱われているであろうか。畜産については、抜けがないとして、3カ所で触れられている。

まず「海上の道」で、日本人にとって稲作が特別なものであることを強調するなかで、「かつて肉類のみによって生を営んだ時代が、我々の中にもあったということは信じにくい。稲以外の作物や採取物の、飢えを医するに足るものは以前も多く、その中にはあるいは起原の稲よりも古いものが、あるかもしれぬ」と、我々のルーツは植物性食物中心の風習を持つとしている。<sup>9)</sup>

2カ所目は、「人とズズダマ」において、「大同三年（八〇八年）に成ると伝うる『古語拾遺』の終りの一節、大地主神が田を営み、牛の肉を田人に食べさせた罰によって、蝗の害を受け苗葉たちまち枯れ損じたという条」を紹介している。<sup>10)</sup> 3カ所目は、「稲の産屋」である。「にいなめ研究会」の反映であろうか、ここでは「にいなめという日本語」の探究が主題となっている。「なめ」は「舐める」であり、試みに食べるという意味であるが、「にいな」に「新」

の漢字を充てるのは当て字であり、「ニホ・ニョウ」、そして稲積方式をにおづみと言い、さらには産屋を「ニブ」と言うことに触れた後、「近畿とその周囲の土地には、ニブ入りという語だけがまだ生きて残っている。(中略)母が安産の喜びに来ることも、または生れ児を見せに親元に行くことも、地を異にして共にニブ入りと呼ばれている。方言の中にも気をつけていたら、これからまだ見つかることだろうが、山陰山陽の畜牛地方などでは、牛が仔を産む時期が近づくことを、ニュウに入る、またはニュウにつくという例もあるという。」<sup>11)</sup>と言及している。

『農業研究』第34号で、加茂や鑄方に依拠しつつ、植物性食物中心の風習を持つ食文化が定着している中に、3世紀乃至は4世紀頃から、朝鮮半島を経由して畜牛、畜馬を飼養する、さらには食する文化が伝播してきたという認識を紹介したが<sup>12)</sup>、「山陰山陽の畜牛地方」とは、当時朝鮮半島との交流が深かった地域である。植物性食物中心の風習と畜牛の発生に対する、『海上の道』での柳田の認識も同様であったと言えそうである。

坂野が指摘するように、戦後民主主義の時代、稲作文化を携えて渡来した弥生人がもともと平和を愛する日本人のルーツであるとする〈日本人=弥生人〉論は、同時に、農業あるいは稲作に対する国民的な関心を引き起こしたが、そのときは、わが国が農業国から工業国への発展へ向けて大きく舵を切る時期に重なる。網野善彦は、農業中心の「はじめに日本人ありき」ともいうべき農本主義的な史観を一貫して批判してきた歴史家であるが、日本列島社会の歴史にはこれまで5つの転換点があったとしている。①第1の転換 長い旧石器時代から縄文時代へ、②第2の転換 稲作を含む複合的な文化を担う弥生人の流入、③第3の転換 列島最初の本格的な国家「日本国」の確立(6世紀から7、8世紀)、④第4の転換 文明史的・民族史的な大転換(13世紀後半から15世紀)、そして、⑤第5の転換を20世紀後半から現在としている。<sup>13)</sup> 第2の転換点は、戦後民主主義の時代に稲作、つまり農業中心の日本国という史観の礎を形成した転換点であり、それは第3の転換「日本国」確立へとつながっていくことになる。第4の転換は、13世紀後半から15世紀にかけてであり、日本列島の内外を結ぶ交通の発達、安定を背景にした人やモノ、さらには銭貨の流通がいつそう広く深く社会に浸透し、自治都市の形成と軌を一にして村落では用水、山

林、河海の漁場、さらには耕地そのものの自治的な管理の掟を定めるものがある。小規模ながら田畠を集約的に経営する農業、女性による養蚕、製糸、織物、さらに製紙、木器の家内手工業、加えて造林、果樹栽培、鉱産物採取など多様な生業に支えられた内陸部の山村や平地村、漁撈、製塩、交易にごくわずかな田畠耕作で維持される海村、さらに商人や鍛冶、鋳物師、轆轤師などの集住する商村・工村など多様な自治的村々が成り立っていった。<sup>14)</sup> 網野は、13世紀後半から15世紀にかけて形成されていく、村々の生活を、庶民による多様な生業の広がりとして描いてみせる。

筆者は『農業研究』第34号において、農業について「人間が地球の空間的広がりや生態系との両立の中で持続的に太陽エネルギーを捕縛し、人間にとって有用な形態に変換するはたらき」と、自然科学的に定義することを提起した。鉱産物採取は少し性格が異なると思うが、「農業」を「生業」と置き換えれば、少々表現がなま煮えであるかも知れないが、そのまま網野が描く村々の生業の世界に親和性があると自分では考えている。それぞれの地域の土地の広狭や地象・気象さらには社会条件に即しながら自給度に濃淡はあるものの、直接・間接に太陽エネルギーを利用する生産と生活が複雑にからみあう成熟した生業社会システムが日本社会に独特な形で自己形成されてきたのであり、その担い手の中心はもはや貴族や僧侶でなく、読み書きや計数能力を身につけた村落や都市の人びとであったと網野は指摘している。

第5の転換は、そのようにして徐々に形成されてきた生業社会システムからのドラステックな離陸として20世紀後半におとずれる。太平洋戦争の敗戦により、出生者や海外からの引き揚げ者による農家人口の膨張も、農村から都市への人口移動により1950年頃にはピークに達し、農地面積が1961年をピークに減少に転ずる（「耕地及び作付面積統計」）。その転換点について、網野は「人類社会が核兵器など、みずからを滅ぼしうる力を開発し、保持するにいたった二十世紀後半の世界の状況、その中であって高度成長期に入り、猛烈な勢いで国土の乱開発を進めた日本の経済社会自体が、公害、自然破壊など、さまざまな形で「自然」そのものから復讐をうけつつあることなど、列島社会の歴史に即してみると、さきに「文明史・民族史的転換」といった十四世紀、五世紀の社会の転換以来といってもよい、自然と人間社会との関係の根底的な転換の進

行が自覚されはじめる」<sup>15)</sup>と述べている。奇しくも『海上の道』が刊行されたのは、日本社会の農地面積がピークの年である1961年であった。そして、柳田は翌年に他界する。脱農業化する第5の転換後の日本社会を見ることはなかった。

### 3. 縄文人と弥生人

日本人をどう捉えるかは、日本社会において、農業、さらには畜産業をどう捉えるかに波及する問題をはらんでいると考えられる。古代史好きの国民性もあってか、それらは、縄文人と弥生人への関心という形で永年にわたり論じられてきた。以下、本年刊行されたばかりの坂野徹著『縄文人と弥生人 「日本人の起源」論争』によりながら、明治以降の同時代の政治・社会の状況に大きく規定されていた人類学・考古学史をたどりつつ、現在の日本人論の到達点を概観しておきたい。

坂野は、『縄文人と弥生人』のまえがきで、「そもそも縄文と弥生という時代区分が中学・高校の教科書に掲載されるようになるのは一九五〇年代以降のことであり、縄文人と（渡来系）弥生人の混血によって日本人が形成されたという学説が人類学者、考古学者の共通理解になったのは一九八〇年代以降のことにすぎない。時代をさかのぼれば、現在のわれわれが当たり前のように受け入れているのはまったく異なる縄文（人）と弥生（人）の了解が社会には広がっていたのである。」<sup>16)</sup>と釘を刺すことから始める。そして、古代の時代区分として日本に独特の「縄文、弥生」の歴史を、明治期の「お雇い外国人」がわが国にもたらした近代的な人類学・考古学研究までさかのぼる。1877年のモースによる大森貝塚発掘である。モースの日本人種論は、一般にプレ・アイヌ説と呼ばれる。モースは、記紀の神武東征に信憑性があるのならば、日本人の祖先は南方から日本列島に渡来し、かつて北方から南下して日本列島を占めていたアイヌの祖先に取って代わったが、貝塚はアイヌ以前の「人種」、つまりプレ・アイヌの生活の跡であり、このプレ・アイヌこそが日本最古の住民にほかならないとしたという。また、ミルンは、アイヌの伝承に依拠しつつコロポクグル説を提唱し、ベルツは、「日本人はアイヌ系、中国・朝鮮の上流階級



に似たタイプの蒙古系、マレー人に似た別のタイプの蒙古系の三つの構成要素からなる」という説を唱えたという。坂野によれば、これらの「お雇い外国人」の主張には違いを超えた共通点があった。記紀の記述に依拠しつつ、かつて日本列島において先住民族と日本人の祖先との間で闘争があり、支配集団の交代があったという、いわば「人種交代モデル」の考え方である。そして、こうした「お雇い外国人」による議論の延長線上で、日本人研究者による草創期の日本人類学・考古学を代表するコロボックル論争（アイヌ・コロボックル論争）が展開されたのである。<sup>17)</sup>

ところで、明治期における土器の認識はどのようなものだったのか。縄文土器、弥生土器の認識や名称についても多くの変遷を経ているのが実情のようである。「縄文(紋)」という呼称は、モースが大森貝塚の発掘報告書で、その形状から「cord marked pottery」という用語を用いたのがはじまりだという。一方の弥生土器は、東京府本郷区向ヶ丘弥生町の向ヶ丘貝塚で発見した壺に由来する。20世紀に入って以降、徐々に弥生土器が縄文土器よりも新しい時代の産物との認識が広がり、大正期に入ると、縄文・弥生土器の区別や先後関係を「人種」の違いと結びつける日本人起源論が提唱されることになった。<sup>18)</sup>

明治期の日本人種論に関しては、先住民族をめぐる激しい論争が続く一方で、先住民を駆逐・征服したとされる日本人の起源についてはほとんど議論がなかったという。その理由として、すでに明治期に日本人の起源をめぐる研究はタブーだったということのようである。同時に、明治期の人類学・考古学の関心の中心が土器や石器など石器時代の遺物遺跡であり、記紀の記述などにもとづけば、それを担ったのは金属器段階で日本列島に渡来した日本人の祖先ではなく、先住民族であったからであるとも、坂野は述べている。そして、集団としての日本人をどうとらえるのかの問題を提起する。「近年では、人類を複数の人種 (race) に分類することはそもそも不可能だという認識が常識となり、人類学者が人種という用語を用いることはほとんどない。彼らが現在、用いるのは集団遺伝学における集団 (population) という概念である。／だが、日本でも一九九〇年代までは、人類学者にとって人種 (race) は学問の根幹に位置する用語であり、研究者のあいだでも、人種が肌の色などの生物学的な人間の区別であるのに対して、文化的な区別を民族と呼ぶという理解が一般的であっ

た。一昔前の自然人類学や文化人類学のテキストをみればわかるが、自然人類学者が扱うのが人種、民族学者（文化人類学者）が扱うのが民族という理解が研究者のあいだでも普通だった」、「歴史的にみると、こうした人種と民族の用語としての使い分けが成立したのは、大正期に入ってからのことである。」<sup>19)</sup> 1990年代の race から population への変化の背景には、DNA 学の発展があるだろう。大正期の人種と民族の分離は、明治期から大正期にかけての諸学の発展と分化、そしてその背景に記紀を縦横に解釈しさらには批判できる状況をつくった大正デモクラシーと呼ばれる時代背景があったが、「日本人種」という概念の生物学的な曖昧さを棚上げして、文化や歴史の面で統一性をもつ集団を「日本民族」と呼ぶことで、「日本人」を問い続けた。かくして、大正期は明治期の人種交替モデルを超えて、諸種の学説が登場する。石器時代から日本列島には日本人の祖先が住んでいたという説、石器時代に日本原人と隣接人類との混血が進んだとする混血説、「縄文式以来住民の血も文化も後代に続いている」という人種連続モデルなどである。<sup>20)</sup>

1920年代後半から30年代にかけては、人類学は自然人類学への傾斜を強め、一方、同時期には戦後の民族学（文化人類学）や民俗学へとつながる組織化もはじまっていた。1925年に柳田が雑誌『民族』を創刊し、34年に日本民族学会（現・日本文化人類学会）、35年には柳田を中心に民間伝承の会（現・日本民俗学会）が設立されることになる。一言で言えば、観念主義を克服し実証主義の開花である。そのような中、考古学では精緻な土器編年研究が進んでいく。縄文と弥生を時代差としてとらえ、弥生文化を水田稲作時代の到来ととらえ、「縄文式時代」「弥生式時代」という呼称が用いられるようになった。それらは、十五年戦争の中断を経て戦後の登呂遺跡発掘にもつながっていった。青銅器や稲作をともなう弥生文化は、大陸から北九州に伝来し東漸し、「縄文式土器使用民族」と「弥生式土器使用民族」のふたつの「系統」により日本人は形成されたが、両者は比較的平和裡に相結び相融けて一団になっていったという考えが広がっていく。が、1930年代後半、人類学・考古学の世界には再び神話の世界が影を落とすことになったという。<sup>21)</sup>

日本列島にはいつ頃から人類が生息していたのかは現在でもなお未解決の問題であるが、明治期にはさしたる根拠のないまま日本列島の石器時代は3千年、

新石器時代以前にはさかのぼらないと考えられていた。それを覆したのが、1946年の相沢忠洋による群馬県岩宿遺跡の発見だったが、そもそも戦前の日本考古学では旧石器かどうかの厳密な判断ができなかったという側面もあったらしい。1920年代後半、中国で相次ぐ北京原人や旧石器発見の報告が、わが国の人類学、考古学へ衝撃を与える。縄文土器使用以前にすでに日本列島に人類が生息しており、いずれは旧石器時代の遺跡が発掘されるだろうと考える学者が出てくる。網野のいう「第1の転換」の黎明である。1930年代初頭、在野考古学者直良信夫が兵庫県明石海岸で人骨を発見する「明石原人」事件が発生したりするが、西洋仕立ての石器時代（研究）と建国神話のダブルスタンダードの時代であった。<sup>22)</sup>

こうして、太平洋戦争の時代に突入していくが、皇国史観・大東亜共栄圏・紀元二千六百年の時代である。戦時中には膨大な数の民族論が発表されたが、その過半が過去における異民族との混血を認めつつ、その後同化が進み、統一的な日本民族となるという歴史を描いていた。考古学者の後藤守一は、1941年に「縄文式文化人は弥生式文化人との間に、血の闘争を試みた後に、住み慣れた故郷の地を逐われて北方へと退いて行った先住民ではなく、接触の当初こそ多少の葛藤もあったでしょうが、やがて両者は渾然として融合して行ったのでありましょう。すなわち後には、大和文化圏内の一員として、春光熙々たる生活を送ったのでしょ。われわれの血の中にはこの縄文式文化人の血が多分に流れていると信じます。」と、書いている。いずれの論考も縄文人と弥生人のあいだには闘争＝征服でなく平和裡の融合があったと強調されるが、おそらく帝国日本が喧伝した大東亜共栄圏建設のイメージの反映でもあるだろう。またさらに注意すべきは、いずれの論考も弥生人の大陸からの渡来を明示的に語っていないことであるという。<sup>23)</sup>

そして、戦後民主主義の考古学の時代については、すでに述べた。そこでは、稲作という高度に発達した文化複合を基調として大きな政治勢力が基本的に平和裡に形成されていくことが強調されるが、その文化複合は、日本列島の人類によって創造されたのではなく渡来したのであり、どのようなルートでいつ渡来したかが、邪馬台国がどこにあったかの問題と同じように盛んに論じられたのである。同時に弥生文化に焦点をあてた議論が活発に行われたのは、戦後復

活したマルクス主義が強調する単線的な唯物史観が弥生文化＝稲作という見方を強化した局面があったという。<sup>24)</sup> そのような歴史的経過を経て、それでは、現在、日本人の起源についてはどのように考えられているのだろうか。

坂野によれば、21世紀に入って以来、日本では縄文文化に関する一種のブームが起こっているという。その嚆矢は、1991年に最初英文で発表された埴原和郎の二重構造モデルである。形質人類学の研究から、現代の日本人につながる集団は基層集団である縄文人と弥生時代に渡来した人々の混血によって成立したとしたが、アイヌや沖縄の人々を除く本州、四国、九州のいわゆる「本土日本人」の成立に関しては現在でも定説とされている。同時に、現在巷にあふれる縄文を日本の基層、深層、古層などととらえる発想の起源は、梅原猛とその先駆者・同伴者である京大系の研究者（いわゆる新京都学派）にある。坂野は、「いずれにしろ、「基層文化」や「深層文化」は、ある種のマジックワードだったといわねばならない。上山や梅原に代表される縄文＝基層（深層）文化論については、その後、考古学者を含めて、さまざまな批判がおこなわれた（泉・下垣「縄文文化と日本文化」など）。それにもかかわらず、こうした表現の延長線上で、縄文（文化）を基層、深層、古層など、さまざまに表現する俗流文化論が現在まで続いていると考えられる。」としつつ、日本人起源論を「だが、すでに現実の日本社会には多様な出自をもつ人間が暮らしている。外国国籍をもつ人、アイヌや沖縄出身者、中国や朝鮮半島出身者、両親のいずれか（あるいは両方）が外国出自である人などなど。日本に暮らす人びとのエスニックな多様性は確実に増大しており、」彼らにとって「起源（ルーツ）は別の意味をもつ。」と、将来を見つめたしめくくりを行っている。<sup>25)</sup>

#### 4. 古代までの日本社会の農業および畜産

今一度、『日本社会の歴史(上)』に戻り、第1の転換点から第3の転換点をたどることで、日本社会における農業の発生と畜産の発生の時期について確認しておきたい。

日本列島がほぼ現状に近い姿をあらわした1万2千年前頃、後期旧石器時代の文化をもつ人びとの生活も後半に入り、約1万年前頃、氷河期が終わりを告

げ、列島に落葉広葉樹林の森が広がると、狩猟・漁撈とともにカシ、コナラ、ドングリ、クリを採集する人びとは、今のところは日本列島の中で独自に生まれたとされている土器の使用をはじめ。同時に、日本列島産の黒曜石が朝鮮半島南端、沿岸州、シベリアの各地で出土するなど、この文化は、アジア大陸の北方、中国大陸や朝鮮半島、東南アジアなど諸地域の文化と海を通じて交流していた。ただこの文化は牧畜の要素を欠いていた。<sup>26)</sup>

縄文時代は、すべての地域、時期を通じて、人間の生活は厳しい自然に圧倒されていた。狩猟の際に、家畜化された犬が使われた。気候の温暖化にともない植生にもかなりの変化があらわれ、青森県の三内丸山ではクリの栽培も行われはじめたと考えられている。福井県の鳥浜遺跡からは日本列島原産ではない瓢箪が出土するように植物の栽培はかなり多方面に行われたと考えられる。樹木の繊維による衣類や履物など、この文化は極めて多様な生業・技術を発展させていった。そして三内丸山のような「縄文都市」も出現する。すでに呪術性をもつ首長の萌芽が、自然的な条件を背景とする集団の間の分業、職能の部分的な分化にともなってあらわれ、広域的な社会的結合が見られるようになっていくが、制度としての階級・身分の分化はまだ見られなかった。<sup>27)</sup>

「列島西部の打製石斧を石の鍬とみて、照葉樹林では採集すべき堅果が乏しいため、この時期の人びとはヒマラヤの南麓から東南アジア、雲南山地、揚子江の南の地域にひろがっている照葉樹林帯の文化に影響され、雑穀（アワ・ヒエ・モロコシ・ソバ）を主要作物とする焼畑農耕をはじめており、」「佐賀県唐津市の菜畑遺跡では、縄文晩期の山ノ寺式土器をとともなう水田遺跡が、木製のえぶり、鍬、朝鮮半島南部によく似た出土品のある石包丁などとともに発掘されている。現在のところ、これが日本列島における最も古い水田遺跡といわれており、アワ、ムギなどの畑作とともに、穀物を中心とする本格的な農耕が紀元前四世紀ごろには列島の一隅で開始されたことは確実である。」<sup>28)</sup>

紀元前3世紀頃、板付（福岡市）の水田遺跡において、はじめて弥生土器が姿をあらわす。もとより、縄文時代以来の狩猟・漁撈・採集に、金属器を使用し本格的な体系をもった稲作を基礎とする弥生文化が加わった。弥生文化がそれまでの縄文文化を基盤としつつ、大陸や半島社会の激動の影響のもとに成立したことは明らかであるが、これをもたらしたのは朝鮮半島あたりからの移住

者にとどまらず、縄文時代以来の朝鮮半島、済州島、対馬、壱岐、北九州、瀬戸内海などの地域を結ぶ海を舞台とした海民の日常的な交流が、この文化流入を支えていた。北九州に根をおろした弥生文化は、数十年といわれる速いスピードで、列島西部に拡大し、おそくとも紀元前2世紀のうちには、南は薩南諸島の一部、東は伊勢海沿岸と丹後半島を結ぶ線にまで広がった。海退によってできた海岸平野や低湿地に、小さな畦で仕切られた小区画の水田が営まれた。しかし果実の採集や狩猟・漁撈による生活を高度に発展させ、それまで列島西部より人口も多かった列島東部の社会は、全体として弥生文化の受け入れに強い抵抗をみせた。約200年間ほどの弥生前期は、おおまかにみると列島西部の弥生文化に対して、列島東部では依然として縄文文化が続くことになった。紀元前1世紀から紀元後1世紀に及ぶ弥生中期になると、稲作は関東から東北南部にいたる列島東部にまで面として広がっていく。そのころの水田は低湿地だけではなく、谷間にもひらかれ、人工の用水・排水溝が造成され、鉄製の工具や石斧でつくられた木製の鍬、鋤、えぶりが用いられた。最近では弥生初期から田植が行われていたといわれている。収穫は石包丁等による穂首刈りで、木臼や堅杵などで脱穀された。種粃は穀霊の宿る神聖なものと考えられ、共同体の高床式倉庫に保管された。この頃になると、倉庫の管理をはじめ、季節ごとの農耕神事をなどの祭祀を主宰し、耕地の開発・造成のための集団的な労働を指導する共同体の首長の役割が大きくなっていく。弥生時代の人びとの生活は水田のみによって支えられていたわけではなく畠作、焼畑が広く行われ、採集や造林、機織、木器生産、狩猟や漁撈などのさまざまな生業に支えられていた。<sup>29)</sup>

『後漢書』『魏志』は、2世紀後半に入る頃、「倭国が大きく乱れ、長期間にわたって戦いがつづいた」と伝えている。あたかもこの頃の中国大陸、朝鮮半島では、ともに激動の時代がはじまっていた。日本列島西部の大乱もこの動きと切り離しがたい関係にあったと考えられる。『魏志』は、邪馬台国卑弥呼のシャーマンの支配を伝える。そこでは、「稲や麻などの農耕、養蚕や織布も行われている。ところが、牛や馬はまだ役畜としては使われていなよう」<sup>30)</sup>あることは、『農業研究』第34号ですでに触れた。

『魏志』や『晋書』によると、弥生時代後期の列島西部は、青銅製の祭器を

用いた祭祀が発達し、朝鮮半島から導入した原料鉄で鍛造した武器や工具が普及し、石器時代は列島東部まで含めて終焉しつつあった。鉢や甕の土器、木製の農具なども大量に生産されるようになり、社会は分業や交易によって支えられるようになっていた。<sup>31)</sup>

こうした社会変化の中、3世紀末から4世紀初めに、前方後円墳に端的に表現される首長たちの連合・統合のあり方に大きな変化がおこる。弥生後期には、前方後円墳が近畿と瀬戸内海地域に画一的な様式と構造をもって広がっていく。このこと自体が近畿・瀬戸内海と北九州の首長連合との統合が進んだあらわれである。古墳に埋葬された首長はなお呪術的な性格をとどめていたとはいえ、それまでと異なる権威をもって、共同体の成員にのぞむようになっていく。あたかも4世紀は、中国大陸では五胡十六国、南北朝の動乱の時代であり、朝鮮半島では高句麗、新羅、百済のいわゆる三国時代になる。これに対して、列島西部では首長連合の新たな統合のもと、朝鮮半島南部への介入を開始する。<sup>32)</sup>

4世紀後半から5世紀にかけて、北は東北地方南部の会津から仙台平野、南は九州の日向から大隅半島にいたる各地に前方後円墳があらわれる。朝鮮半島では高句麗、百済、新羅の間に激しい抗争が起こっていた。それまでも半島南部と密接な関係をもっていた北九州の勢力を統合した近畿の首長たちは、主として百済、加羅と手を結びつつ、半島における首長連合の対立に関与しはじめた。こうした同盟関係は、南下しようとする高句麗の圧力が増すにともない、4世紀末から5世紀初頭にかけて、いよいよ緊密になり、使者の往復、物的・人的な交流が頻繁になる。このような通交と戦闘の中で、半島からはさまざまな職能民を含むきわめて多くの人びとが海を渡って列島に移住した、埴原和郎によれば、列島西部に移住した人の数は、弥生時代の開始から古墳時代までの千年間に、女性を含めて百万人から百五十万人に及んだと推定される。<sup>33)</sup> こうして、日本列島は国家形成への道を歩みはじめる。

さて、ようやく前稿（『農業研究』第34号）で述べた「日本列島での家畜の発生」の時点まで再びもどってきた。日本列島には、旧石器時代から人類が生息し、同時に列島外から、さまざまな動因、規模やルートで、波状的に渡来する人びともいた。それらの人びとが縄文土器をおそらく創造し、照葉樹林帯の

文化を受け入れ、雑穀を主要作物とする農耕がはじまっていた。紀元前4世紀頃になると、稲作をともなう弥生文化が大陸からの移住者とともに伝わってくる（渡来のルートはさまざまだったのではないだろうか。）。彼らは、先住民を駆逐・征服するという形ではなく、先住民と融和・混血していき、特に列島西部では水田を重視する地域社会が形成され、同時にそれを統合する首長も出現する。4世紀末から5世紀初頭にかけての朝鮮半島の動乱は、連合化しつつあった日本列島西部を巻き込み、半島からは列島へ渡来人が殺到する。そして彼らは、それまで列島に定着していなかった家畜の牛や馬を持ち込むことになった、というのが、日本人と農業、家畜のはじまりであると、当面改めて確認できたのではないかと考えている。

## 5. おわりに

これからの執筆の計画をあらかじめ述べておくと、加茂儀一著『日本畜産史 食肉・乳酪篇』によりながら、古代以降の食肉・乳酪の歴史をまずたどってみる。その後、古島敏雄の『日本農業技術史』や、さらには宮崎安貞の『農業全書』、土屋又三郎の『耕家春秋』などによりつつ、農業生産の中にあられる家畜について考察を行い、引き続き日本社会に於ける畜産の位置づけを未来志向的に続けることとしたい。

## 注

- 1) 参考文献2、697頁
- 2) 参考文献2、9頁
- 3) 参考文献3、上2-6頁
- 4) 参考文献2、19頁
- 5) 参考文献2、42頁
- 6) 参考文献2、51-53頁
- 7) 参考文献2、56頁
- 8) 参考文献4、221、224頁
- 9) 参考文献2、52頁
- 10) 参考文献2、233頁



- 11) 参考文献 2、257-58 頁
- 12) 参考文献 1、251-54 頁
- 13) 参考文献 5、8-9 頁
- 14) 参考文献 3、下 40-41 頁
- 15) 参考文献 3、下 161-162 頁
- 16) 参考文献 4、iii 頁
- 17) 参考文献 4、11-18 頁
- 18) 参考文献 4、27-30 頁
- 19) 参考文献 4、37-38 頁
- 20) 参考文献 4、57-100 頁
- 21) 参考文献 4、101-142 頁
- 22) 参考文献 4、143-163 頁
- 23) 参考文献 4、165-201 頁
- 24) 参考文献 4、224 頁
- 25) 参考文献 4、272、275-276 頁
- 26) 参考文献 3、上 7-12 頁
- 27) 参考文献 3、上 14-19 頁
- 28) 参考文献 3、上 22-23 頁
- 29) 参考文献 3、上 27-32 頁
- 30) 参考文献 3、上 37-39 頁
- 31) 参考文献 3、上 43 頁
- 32) 参考文献 3、上 44-47 頁
- 33) 参考文献 3、上 48-50 頁

## 参考文献

- 1 岩元明久 (2021) 「つくば良農の耕畜連携実験構想について」『農業研究』第 34 号 239-271
- 2 柳田國男 (1989) 『柳田國男全集 I』ちくま文庫
- 3 網野善彦 (1997) 『日本社会の歴史 (上) (中) (下)』岩波新書
- 4 坂野徹 (2022) 『縄文人と弥生人 「日本人の起源」論争』中公新書
- 5 岩元明久 (2010) 「今後の農業技術開発・普及機能のあり方に関する研究会の事務局を担当するにあたって」『農業』2月号